

## 奈良県立図書情報館報

うんてい

(うんてい復刊) 第7号

平成27(2015)年3月1日

## 図書館のある生活 奈良県立図書情報館創立10周年にあたって 館長 千田 稔

奈良県立図書情報館が、平成17(2005)年、現在の地に創立して、10周年を迎えることになりました。進化する図書館の理念のもとで、日本の公共図書館のモデルとして、今も注目されています。入館者は、500万人を達成し、われわれにとって、うれしいことです。図書の閲覧・貸出とともに、文化的な催しをやるというわれわれの先進的な試みは、今では各地の公共図書館の定番になりつつあります。10周年を迎えるにあたって、われわれは、さらに脱皮しなければなりません。

一つのあり方として、コンサートや落語、絵画展示などの、これまでのカルチャータ的な催しも含めて、利用者の日常生活が図書情報館とともにあるようなスタイルを考えてみたいと思います。日々の生活の一部に図

書情報館が密接なつながりをもつような仕組みを構想できないでしょうか。早い話が、衣食住の情報の場として、公共図書館の新しいモデルを構築したいと考えます。

「図書館のある生活」。

今よりも多くの人たちの身近な存在となるコピーの提案です。「どちらへ?」「ちょっと図書館へ」「何しに?」「犬の名前をつけるヒントがないかと思って」「私も図書館よ」「何の御用で」「子供がナポレオンの帽子を作って欲しいというものだから」。佐保川の桜をめながら、図書情報館の近くで「ちょっと借りてくる」「何の本?」「いや、トイレを」。トイレも人生で欠かせない生活の重要な場所なのです。

## Contents

- ・ 巻頭言 図書館のある生活 奈良県立図書情報館創立10周年にあたって . . . . . 1
- ・ 所蔵資料紹介『大和名処 ならのしるべ』 . . . . . 2
- ・ 奈良のもの・ひと⑦「奈良と柿と正岡子規」 . . . . . 3
- ・ 資料収集 地図資料の紹介 . . . . . 4
- ・ コーナー紹介 大活字本とCDブックのコーナー . . . . . 5
- ・ 地域・公文書紹介 奈良公園史編纂資料 . . . . . 6
- ・ 地域・公文書紹介 郷土史家藤田祥光と藤田文庫について . . . . . 7
- ・ 図書情報館で調べる レファレンス事例紹介 <第7回> . . . . . 8
- ・ ホームページ、アトリエ・オーサリングルームの利用環境整備 . . . . . 9
- ・ イベント掲示板 . . . . . 10

## 【所蔵資料紹介】

### ◆『大和名処 ならのしるべ』明治28(1895)年

「大和の水木か、水木の和和か」これは、明治中期から昭和初期にかけて活躍した、奈良郷土史研究者の水木要太郎を評したものです。多趣味で博識な文化人、種々の古物を収集したコレクターとしての顔も持ち、74歳で没するまでの間、様々なかたちで大和に関わり続けた水木は、いつしか奈良の生き字引と呼ばれるようになりました。

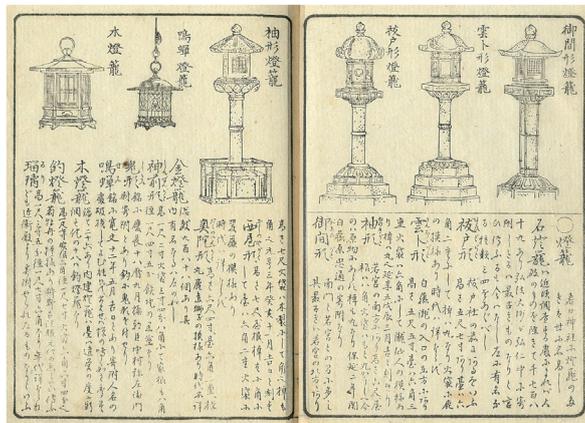
愛媛県伊予郡に生まれ、東京高等師範学校に学んだ水木は、明治23(1890)年25歳で奈良県尋常師範学校の教員として赴任します。その後県内各地の名所旧跡を訪ねて研究を重ね、5年後には3冊の案内書を著します。

写真は、明治28(1895)年に刊行された案内書のうちの一冊『大和名処 ならのしるべ』です。体裁は和装本、全42ページの本文はくずし字で綴られ、春日大社、東大寺などの社寺を中心とした名所のほか、鹿の角切りといった行事についても解説されています。特筆すべきは、文化財や行事についての記述が非常に詳細なことであり、これは、水木の初期の研究成果が反映されたものと言えます。

例えば、東大寺の大仏を紹介した箇所では、総長だけでなく、耳や目の寸法など20を超える項目の数値が記載されています。また、春日大社の燈籠については、複数ある形態の特徴が、細かな絵とともに記されています。



本尊金銅盧舎那佛座像



燈籠



帝國奈良博物館

水木が名所の調査研究を開始した明治20年代、奈良は古代文化の中心地としてにわかに注目を集めはじめ、中央から有力な政治家や文化人が次々と来県するようになっていました。そして20年代後半になると、鉄道が開通し、奈良へのアクセスが容易になったこともあり、一般人も奈良観光に訪れるようになります。明治28(1895)年に帝国奈良博物館が開館したことや、同年、京都岡崎の地で第4回内国勸業博覧会が開催され、同時に平安遷都千百年記念祭の一連の催事が行われたことも、観光客の増加を促しました。

こうした状況のもとに刊行された水木の案内書は、時代のニーズに合致した待望の一冊として歓迎され、のちに携帯に便利なよう挿絵のみを省いた袖珍本『袖珍 奈良のしるべ』も刊行されます。

その後も水木は、郷土史解説書の刊行や複数の郡史編纂などに携り業績を挙げ、明治42(1909)年には、奈良女子高等師範学校(現奈良女子大学)の教授として迎えられます。こうして奈良の文化人として確固たる地位を確立した水木は、東京から官僚や著名な学者らが奈良を訪れた際の案内役を務め、様々な調査会や委員会のメンバーに名を連ねるようになりますが、重鎮となってからも、彼の穏やかで気さくな人柄は変わることはありませんでした。

明治39(1906)年以降水木は、半紙を綴じた帳面を持ち歩き、交流を持った相手の似顔絵を描いては一筆書いてもらう、といったサイン収集を続けます。この帳面は「水木の和和帳」として当時からよく知られ、多くの人が署名や挿絵などを書き込みました。和和帳には、学者や文化人にまぎって、小さな園児のサインがあったり、奈良に来るたび水木のもとを訪れた人々の名前が、繰り返し現れたりします。300冊以上にものぼる和和帳が残されていることから、誰からも慕われたであろう水木の人柄がうかがえます。

## 【参考文献】

- 久留島浩ほか編『文人世界の光芒と古都奈良：大和の生き字引・水木要太郎』思文閣出版 2009年
- 『企画展示 収集家一〇〇年の軌跡：水木コレクションのすべて』国立歴史民俗博物館 1998年

(徳山 さおり)

### ◆神様の食べ物

柿はギリシャ語で「神様の食べ物」を意味する「Diospyros kaki Thunberg」を学名に持ち、美味で栄養価が高く、世界中に「Kaki」で通じる、日本が世界に誇れる果物です。

一説には日本が原産地とも言われていますが、実のところ、日本原産の柿は氷河期に絶滅してしまったようです。したがって、現在の柿は中国原産と考えられており、縄文・弥生時代頃には渡来していたことが、遺跡発掘調査などからわかっています。

記録としては、正倉院文書に柿の購入に関する記述が見受けられ、それを裏付けるように平城京跡から種などが出土しています。このことから、奈良時代にはすでに柿は日本人の生活に深くかかわっていたことがうかがわれます。

### ◆奈良県原産の「御所柿」<sup>ごしよがき</sup>

柿は甘柿と渋柿、そしてどちらにも属さない中間的なものがあるという、他の果樹にはない大きな特徴を持っています。

柿は東アジアに広く分布していますが、甘柿は中国や朝鮮半島ではほとんどみられず、日本が原産とも言われています。そして甘柿のルーツと言われているのが、奈良県御所市原産の御所柿です。

御所柿は300年以上の歴史をもち、富有柿や次郎柿が出現する以前は、近畿・東海地方を中心に広く栽培されてきた、最も古い完全甘柿品種です。



御所柿

江戸時代の本草書『本朝食鑑』の柿の項には、「…御所柿だけは味が絶美で、上品とされる。(中略)和州・城州産がいちばんよく…」と記述され、宮中や将軍家にも献上されていました。江戸時代には、御所柿のおいしさが全国に広がっていたようです。

しかし、病害虫に弱く収穫量が少ないなどの理由から、御所柿の生産は次第に減少し、平成26(2014)年には御所柿発祥地の御所市でも0.2ha程での栽培にとどまり、現在では幻の柿とも言われています。

### ◆柿と正岡子規

10月26日は柿の日に制定されています。これは、正岡子規が明治28(1895)年10月26日からの奈良旅行で、かの有名な句「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」を詠んだとされることにちなんでいます。

子規の門弟であった高浜虚子は、子規をモデルにした小説『柿二つ』で、「…二つ共に食ひ盡してしまつて後彼は盆の上にむき棄ててある皮を取上げて其皮に附いてゐる肉を少しも残さぬやうに前歯でかじり取つた」と、その柿好きな様子を描いています。

子規の随筆『くだもの』によると、彼は樽柿なら一度に7~8個食べるのが常だったそうです。またこの随筆では、「柿などといふものは従来詩人にも歌よみにも見放されてをるもので、殊に奈良に柿を配合するといふ様な事は思ひもよらなかつた事である。余は此新しい配合を見つけ出して非常に嬉しかつた」とも述べています。

奈良の柿は有名であるにも関わらず、文学的題材として取り扱われることが少なかったことに、柿の季節に奈良を訪れた子規は気づいたのでした。子規は柿を詠み込んだ俳句を160句程残していますが、その中には、先出の句以外にも「奈良の宿御所柿くへば鹿が鳴く」「家まばらに澁柿熟す西の京」など、奈良を組み合わせたものも数多くあります。

正岡子規は、奈良と柿の関係をより深くしてくれた一人といえるでしょう。

#### 【参考文献】

- 人見必大『本朝食鑑 2(東洋文庫 312)』平凡社 1976年
- 今井敬潤『柿の民俗誌：柿と柿渋(近畿民俗叢書：8)』現代創造社 1990年
- 京都府立山城郷土資料館編集『甘柿・干し柿・柿渋』京都府立山城郷土資料館 2009年
- 坪内稔典『柿喰ふ子規の俳句作法』岩波書店 2005年
- 戸石重利『子規と四季のくだもの』文芸社 2002年
- 『正岡子規、伊藤左千夫、長塚節集(現代日本文学全集：6)』筑摩書房 1955年
- 『高濱虚子集(現代日本文学全集：66)』筑摩書房 1957年
- 奈良県農林部ウェブサイト  
http://www.pref.nara.jp/1218.htm

(谷川 幸子)

地図は、大きく一般図と主題図に分けられます。

一般図とは、地形図のように地表面の自然物や人工物をつぶさに表現した地図のことです。そしてその一般図を土台とし、特定の主題について専門的に表した地図が主題図です。地質図や道路地図、住宅地図などがこれにあたります。

先年、当館は地図コレクターの大塚隆氏から多くの地図関係資料の寄贈を受け、より充実したコレクションを構築することができました。

ここでは、当館所蔵の地図資料について、いくつかをご紹介します。

### ◆国土地理院地形図

国土地理院は国土交通省の特別の機関で、国土の測量および基本地図の作成などを行っています。

地形図の縮尺には1:10,000から1:5,000,000まで数段階ありますが、当館では、1:50,000の全国分と1:25,000の奈良県内分を所蔵し、3階吹抜け南側の引き出し式書架に置いています。

なお、奈良県の地形図については、さらに詳しい1:10,000(折図)や、明治期に帝国陸軍参謀本部陸地測量部(国土地理院の前身)が作成した1:20,000の複製などもあり、書庫に保存しています。



『西大寺：1万分の1地形図(一部抜粋)』国土地理院発行

### ◆住宅地図

住宅地図は、一般図に建物名や居住者名、番地などを表示した地図です。

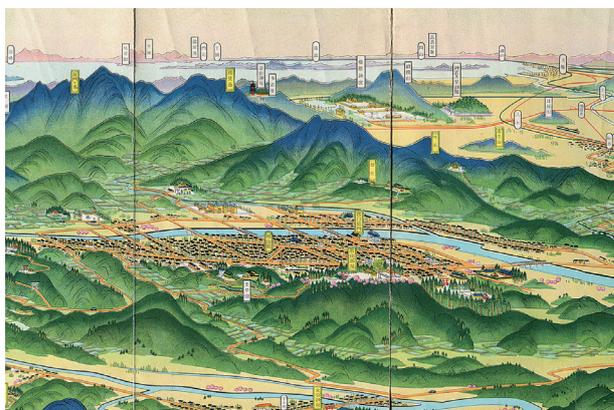
当館では現在、B4判『ゼンリン住宅地図』の奈良県内分を継続収集しており、奈良市は1960年代後半から、その他の市町村は1990年前後から所蔵しています。縮尺は地域によって異なりますが、概ね1:1,500または1:3,000と大きく、交差点名や一方通行などの道路交通情報も表示されています。

改訂に合わせて当館も更新し、3階メインカウンター西側の参考図書コーナーに一画を設け、市町村別に並べています。

### ◆古地図

古地図は基本的にすべて書庫に収めており、特に状態がデリケートなものは、デジタル化してウェブサイトにて画像公開しています。

近代以前の地図には、明治23(1890)年『奈良町実測全図』や大正6(1917)年『實地踏測 奈良市街全図』のような精図もあれば、昭和11(1936)年『奈良県奈良市推奨奈良観光市街地図：凸版豪華版』や昭和13(1938)年『大和宇陀郡神武天皇聖蹟圖繪』といった芸術的な鳥瞰図もあります。



『大和宇陀郡神武天皇聖蹟圖繪(一部抜粋)』吉田初三郎作画

### ◆複写について

図書館内では、著作権法の規定により、調査研究を目的とする場合に限り、著作物の一部分を一人につき一部のみ複写可能です。

この場合の一部分とは、原則として著作物の半分までを指しますが、地図の場合は、一冊の中に掲載されている図のそれぞれが一つの著作物です。

したがって、見開き頁で一つの図であれば、片頁までしか複写できませんのでご注意ください。

ただし、国土地理院発行の地形図は、私的利用や教育機関で利用する場合などの条件下に限り、全面複写が可能と測量法で規定されています。

縮尺が異なる地図は、ズームイン・アウトの関係にあります。また、地形図や住宅地図などには標高を表す等高線があるため、地質図と合わせることで、地面を起点とした上下関係が生まれます。

さらに、違う測量年の地図同士は時間軸上を移動したものと捉えることもできますから、同じ地域の地図が数種類あれば、三次元的な見方ができます。

当館の多種多様な地図を、ぜひご利用ください。

(中西 玄)

## コーナー紹介 「大活字本とCDブックのコーナー」

大きめの文字で印刷された「大活字本」や、小説などを耳で聞く「CDブック」という資料があるのをご存じでしょうか。

「最近、小さな文字が見えにくくなってきた」、「目の病気で一時的に本が読みづらい」、「腕の骨折で本のページをめくるのがままならない」など、本を読みたくても読みづらいということが、どんな方にも起こってしまう場合があります。そんな時にこのような資料をご利用いただくのはいかがでしょうか。また、そうでない時も、これらの資料には独特の良さがありますので、ぜひ一度この良さを味わっていただきたいと思います。どなたでもご利用いただける資料です。2階カウンター前に、コーナーとして集めていますので、どうぞご利用ください。

### ◆大活字本

人気があるのは、藤沢周平の『たそがれ清兵衛』や池波正太郎の『鬼平犯科帳』、夏目漱石の『こころ』、浅田次郎の『鉄道員』といった小説が多いでしょうか。たとえば、『たそがれ清兵衛』は新潮文庫を原本としており、もともとは文庫1冊ですが、ほぼ倍の大きさで、冊数も2冊にして、大きな字で読みやすく編集されているのが、大活字本の特徴です。



もちろん小説だけでなく、『日本人の手紙』という著名人の手紙を「恋文」「親子」「遺書」といったテーマごとに集めたものや、『暦ことば辞典』『実用折り紙百科』といったものもあります。特に、手紙は、大活字で読むと、一文字一文字を丁寧に目で追うことができ、いつもよりもこころに伝わってくる感じがします。たとえば森鷗外が皇室博物館総長として正倉院御物風通のために奈良に赴いた際の手紙（大正7（1918）年11月24日）は、子どもの茉莉（マリー）、杏奴（アンヌ）、類（ルイ）の3人に宛てて「パパハマリダノ、アンヌコダノ、ボンチコダノガ、ミタクナッテコマリマス。」と、内容からも、子ども

にも読めるようにカタカナで書かれていることから、深い愛情がじっくり伝わってきます。

大活字本は、約400冊所蔵しています。

### ◆CDブック



壇ふみが朗読する『日本むかしばなし集』や、江守徹朗読の志賀直哉著『小僧の神様』、市原悦子朗読の松本清張著『巻頭句の女』といった、名だたる俳優たちの声で聞く作品や、何人もの声優がそれぞれの登場人物を演じ、効果音や情景に合わせた音楽とともに編集されたラジオドラマ仕立ての『シャーロックホームズ』のシリーズなど、ただ聞くだけでなく、聞くことを楽しめるようにも作られているCDブックは、隠れたおすすめ資料です。もちろんいづれも、ご自宅のCDプレーヤー等でお聞きいただける形式の資料です。

文字ではなかなか頭に入りやすく苦戦してしまう古典文学も、『古事記』は中村吉右衛門による朗読、『源氏物語』は円地文子訳を竹下景子が朗読するなど、心地よく耳から読むことができます。またCDブックならではの、司馬遼太郎の講演をそのまま収録したものや、奈良の宮大工西岡常一の語りを収録したものなども、本人の声をその場で聞いているような臨場感があり、ぜひご利用いただきたい資料です。

CDブックは約500点所蔵しています。

大活字本もCDブックも、棚を見ると意外と少ないと思われるかもしれませんが、これは、借りておられる方が多いせいでもあります。ご希望のものが貸出中の場合は、予約のお申込みで、資料をお取り置きすることができます。どうぞお気軽にカウンターでご相談ください。

（北森 亜由美）

平成 26 (2014) 年 4 月 1 日をもって奈良公園管理事務所が雑司町から芝辻町へ移転し、名称も奈良公園事務所と変更されました。この事務所の移転作業の過程において、平成 25 (2013) 年 12 月に当館へ事務所が所有する明治から昭和期の行政文書約 120 冊の移管がありました。この行政文書は、奈良公園開設百周年を記念して昭和 57 (1982) 年に奈良県が刊行した『奈良公園史』の基礎資料として編纂当時県庁舎内の書庫から集められ、その後事務所に保管されていたものです。当館ではこれらの資料群を『奈良公園史編纂資料』として、現在整理作業を進めています。内容の審査などを経て順次当館の蔵書検索システムに登録し、利用に供しています。

『奈良公園史編纂資料』は、公園課、観光課といったその当時奈良公園を管理していた所属の起案文書などのほか、中央省庁との往復文書や移牒などが綴られた簿冊もあります。例えば、『奈良公園史』の 93～94 頁に「わが奈良公園は明治 13 (1880) 年 2 月 14 日、太政官 (当時の政府) の内務卿伊藤博文の開設認可によって誕生した」として、「奈良公園地制定認可書」の図版が紹介されています。明治 12 (1879) 年 5 月、当時大和国を管轄していた堺県令税所篤 (代理堺県大書記官吉田豊文) から内務卿伊藤博文宛に奈良公園開設の伺書が提出されます。これに伊藤が「書面之趣聞届候事」という朱書を加え、堺県に下付しました。これをもって奈良公園開設が認可されたわけです。ここで紹介されている「奈良公園地制定認可書」の原本は、『官省御指令綴込』(1-M9-25) に綴られています。

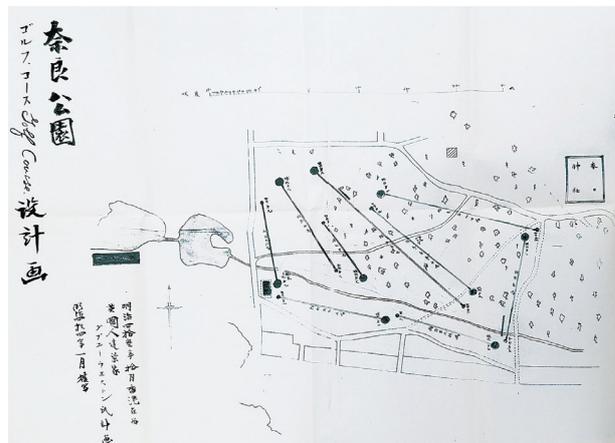
さて、次にご紹介するのは、『公園 (諸施設・改良・諸計画) 一件』(1-S17-29) に収められている明治 43 (1910) 年 12 月 15 日付の在香港総領事代理の船津辰一郎から外務大臣小村寿太郎に宛てられた「奈良公園ニ『ゴルフ』運動場設置方ニ関スル件」と題された文書です。差出人の船津辰一郎は、明治中期から昭和初年まで中国各地で勤務し、在華日本紡績同業会理事・上海特別市政府顧問を務め、日中戦争勃発直後に彼が行った和平工作は「船津工作」として有名です。

以下、文書の内容を引用します。

当地建設業者ニシテ「ゴルフ」熱心家ナル「ウエルトン」氏が小官ヲ来訪シ語ル所ニヨレバ、奈良公園ニハ「ゴルフ」運動場トシテ最適ナル地域アリ、右地域ニ相当ノ設備ヲ施セバ東洋ニ於ケル第一ノ「ゴルフ」運動場ト

ナル可ク適好ノ運動場ヲ欠ク、在東洋ゴルフ運動家ニシテ本邦ヲ漫遊スルモノハ必ず奈良ニ立寄ル様可ニ相成、從テ同地ノ繁栄トモナル可クニ付、是非右設備ヲナス様致度希望ヲ語り、且右設備ニハ同地域内ニテ目下殆ンド不用ニ属スル樹木ヲ切り払フ必要アリ、其樹木払下代ヲ以テ設備ノ費ニ充当スルヲ得可キ趣ニ候、(以下省略)

外務省罫紙に記されたこの文書は、年をまたいだ明治 44 (1911) 年 1 月 6 日に奈良公園主事から勸業課長、内務部長、そして当時の県知事若林實蔵へと供覧されています。また、「ウエルトン」氏なる人物が作成した 9 コースからなる「奈良公園ゴルフコース設計画」の複写 (下写真) も添えられており、これを見ると飛火野の辺り一帯に計画していたことがわかります。奈良県で最も古いゴルフ場は昭和 32 (1957) 年開場の奈良市宝来の奈良国際ゴルフ倶楽部ですが、この 40 年以上前にこのような提案がされていたということもさることながら、奈良公園の中にゴルフ場を設置し、当該地域の樹木を売却し設備費に充当しようとしたウエルトン氏の計画には驚きと困惑を覚えます。日本最初のゴルフ場である神戸ゴルフ倶楽部 (明治 36 年開場) を調査した形跡はあるものの、その後の県の対応など詳細は不明です。ただ、御蓋山を望む絶好のポイントでもあり、奈良のシンボリック存在である鹿たちが日々群れ遊ぶ現在の飛火野の光景は、県がゴルフ場計画の打診を退けた何よりの証明でしょう。



ウエルトン氏による「奈良公園ゴルフコース設計画」

(松田 憲子)

藤田文庫の著者の藤田氏は、奈良市の人で、著名な紙商にして歌人かつ郷土史家です。明治10(1877)年に生まれ、名は庄二郎、字は祥光といます。早くから奈良の商人として独立し、先ず手をつけたのがタバコでした。明治32(1899)年、23歳で、評判の良い遠州タバコが、まだ関西地方に出廻っていないことに目をつけ、静岡県の本場と特約を結び、関西地方一手販売の権利者として、大阪、京都、堺、神戸、伊賀伊勢方面まで販売。明治38(1905)年、タバコが専売になると、タバコに見切りをつけて、一転して紙屋となりました。土佐の本場との直取引で、良質の紙を地方に供給して、更に大成功を収めました。29歳のときに金春七郎太夫に能楽を学び、37歳には大日本歌道奨励会奈良支部幹事になっており、46歳には南宋画を学び杉雲と号すなどの趣味人でもありました。

50歳を過ぎて、今度は商売とは全く無関係の郷土史を志し、書斎の人となり、奈良の研究に余生をそそぎました。昭和2(1927)年、51歳の春、大乘院の調査研究に手をつけたのがそもその初めで、約2年間にわたり古文書その他の資料から大乘院史の詳細な原稿をまとめ上げました。同5(1930)年54歳で家業を養嗣子にゆずり、全国を巡遊し、中国を歴遊し、同年「関西日報」から奈良県歌人として表彰されています。同6(1931)年発起して奈良のことに関し、あらゆる項目を、主として維新以後におき、その変遷を調査することを志し、以来20年間生涯の事業として没頭しました(藤田文庫「履歴書」など)。

調査した項目は、「正倉院資料」「奈良県史」「奈良奉行所」「奈良奉行所時代諸事控」「奈良の学校」「御一新」など江戸期から明治初年の奈良の歴史的研究が中心です。また、「南都の能楽」「若草山三笠山」「元興寺」「伴林光平と奈良」など、奈良固有の地誌、風物、人物の広範囲な調査を行っています(藤田文庫「祥光著書と諸家」)。「奈良町史」のごときは、明治維新から明治10年代の奈良を研究したものとして他に類をみず、「奈良名産史」は、わらび餅・春日盆・奈良人形など名産のすべてにわたって丹念に調べられ、この他「春日神鹿」や「平城古今史」などにも取り組んでいます。

昭和10(1935)年には、奈良郷土会からの依頼で、10月7日に大乘院旧地について、同12(1937)年2月9日には、奈良第一尋常高等小学校(現奈良市立椿井小学校)で、明治10(1877)年の行幸に関する講話をしています(藤田文庫「履歴書」)。また、同18

(1943)年4月7日から奈良図書館で「伴林光平遺墨展」が催されたときには、「伴林光平と奈良」の講演

を行っています(朝日新聞)。

同氏は、こうした調査の過程で、江戸・明治の奈良の史料を筆写しているのが、今では藤田文庫で見られない史料が多く含まれています。例えば「寛文十年 奈良町北方二十五町家職御改帳」などは、当時の奈良町の生業を知ることができる貴重な史料であるため、平成15(2003)年度の『奈良市歴史資料調査報告書』に翻刻されました。このほかにも、江戸・明治の奈良の調査・研究をするには、まず藤田文庫に当たって、同氏がどこまで調べているのかを知ること、今後の研究の方針を立てることが出来ます。同氏の論考で活字になっているのは、『奈良叢記』(駸々堂書店、昭和17年)に所収されている「近世以降の春日神鹿」だけであるため、手稿本の藤田文庫で読む必要があります。

藤田祥光氏は、享年74歳で、昭和25(1950)年8月14日永眠しました。翌26(1951)年7月に、遺族から編著および手写記録類など223筆と、調査・研究の過程で同氏が収集した奈良町および寺社の文献資料394点が当館に寄贈されました(『奈良県立奈良図書館郷土資料目録』)。

奈良郷土会会長の高田十郎は、同氏の弔辞の中で、「凡そ奈良の歴史を調べる学者は、世にいくらもありません。併し明治維新以来のこととなると、分かった人が存外少ないのであります。爾来20余年、あなたは所謂奈良近代歴史の生字引として、其道の専門学者の間にも、忘れることのできぬ藤田さんとなって居られました。こうして、初めにはタバコ商、次には紙商、最後には奈良の生字引、殆ど普通の人間の三分の仕事、一つのカラダで成し遂げられたと申してよろしい。」と称えています(『まほろば』16号、高田十郎先生特集)。



(大宮 守友)

◆一般資料から◆

Q：イワン・クラムスコイの画集が見たい。  
特に「忘れえぬ人」という題の絵を探している。

A：イワン・ニコラエヴィチ・クラムスコイ（1837-1887）はロシア美術を代表する画家の一人です。19世紀後半のロシアのリアリズム絵画の隆盛を牽引した「移動展派」の指導的存在で、高度な技術に裏打ちされた描写力は多くの後輩たちに影響を与え、特に肖像画の分野で優れた作品を残しています。

「クラムスコイ」で当館OPACを検索しても該当資料はありません。インターネット検索で「忘れえぬ人」はトレチャコフ美術館所蔵の絵画であり、「見知らぬ女」「忘れえぬ女」などの邦題もあることがわかりました。霧に包まれたサンクト・ペテルブルグの町を背景に黒い毛皮の外套を身につけた美しい女性が、馬車の上から蔑むような視線を見る者に投げかけている印象的な絵画です。美術館名で検索した当館資料を確認すると、『トレチャコフ美術館：モスクワ：絵画グラフィック・アート彫刻』に「見知らぬ人」（図版61）の題名で該当の作品がありました。この資料には、他にも「自画像」「荒野のキリスト」「レオ・トルストイの肖像」といったクラムスコイの作品が掲載されています。また『西洋美術作品レファレンス事典』を確認すると、「見知らぬ女」として『世界美術大全集 21巻』にも掲載されていることがわかりました。

それ以外に、画集ではありませんが、『忘れえぬ女（ひと）：帝政ロシアの画家・クラムスコイの生涯』という伝記の表紙にこの作品があり、本文中に解説も記載されています。この図書は当館では所蔵していませんが、県内の市町村立図書館に所蔵館がありますので、取り寄せることができます。

【参考文献】

- 『トレチャコフ美術館：モスクワ：絵画グラフィック・アート彫刻』図録「トレチャコフ美術館」刊行委員会 1989年
- 『西洋美術作品レファレンス事典 絵画篇 19世紀印象派以降』日外アソシエーツ 2005年
- 馬淵明子責任編集『リアリズム（世界美術大全集 西洋編 第21巻）』小学館 1993年
- 鈴木竹夫『忘れえぬ女（ひと）：帝政ロシアの画家・クラムスコイの生涯』蝸牛社 1992年

（植原 千恵）

◆地域資料から◆

Q：土屋文明が第1回正倉院展で見て歌に詠んだものに「朱蜜陀」と称している宝物がある。これの写真・図録が見たい。

A：土屋文明（1890-1990）は群馬県出身の歌人であり、昭和5（1930）年には『アララギ』の編集発行人となった人物です。歌以外に万葉集研究にも功績があります。

質問にある「朱蜜陀」は、歌集『山下水』の「正倉院展観に寄せて」に収録されている歌「押され気味に進む群衆の一人にて朱蜜陀の前に吐く息硝子の曇となる」に出てきます。そこで当館所蔵『正倉院特別展観目録』を確認しましたが、朱蜜陀という名前の宝物は確認できませんでした。では朱蜜陀とは何かと考え『日本国語大辞典』などを調べたところ、朱蜜陀という言葉はありませんでしたが、密陀絵という絵の技法があることがわかりました。ここから朱蜜陀とは朱色の密陀絵がほどこされた宝物ではないかと考えました。『正倉院特別展観目録』には「密陀彩繪箱」「密陀繪漆皮箱」という2品の宝物が載っており、このどちらかが「朱蜜陀」にあたると思われます。念のため群馬県立土屋文明記念文学館に、朱蜜陀と宝物についての記録は無いか問合せをしましたが記録は残っていないとのことでした。また、正倉院事務所にも問合せをしたところ「朱蜜陀」については不明だが密陀であるならば先に挙げた2品のどちらかであろうとの回答を得ました。

以上から土屋文明が歌に詠んだ「朱蜜陀」とは「密陀彩繪箱」か「密陀繪漆皮箱」のどちらかであると考えられます。「密陀彩繪箱」は第64回正倉院展、「密陀繪漆皮箱」は第62回正倉院展にそれぞれ出品されており、図録でカラー写真を見ることが出来ます（なお、「密陀繪漆皮箱」は62回正倉院展では「密陀繪皮箱」の名前で出品されています）。

【参考文献】

- 小市巳世司編『群馬文学全集 第二巻 土屋文明』群馬県立土屋文明記念文学館 1999年
- 帝室博物館編『正倉院特別展観目録』帝室博物館 1946年 ※複製
- 奈良国立博物館編『第62回正倉院展目録』奈良国立博物館 2010年
- 奈良国立博物館編『第64回正倉院展目録』奈良国立博物館 2012年

（上田 裕介）

## ホームページ、アトリエ・オーサリングルームの利用環境整備

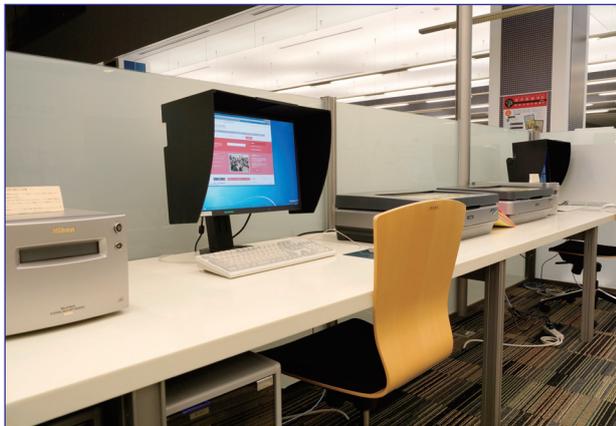
開館以来、多くの利用者に活用されている、アトリエ、オーサリングルームに設置のパソコンやスキャナ機器をより活用していただけるよう、利用環境の整備をしました。ウェブサイト（ホームページ）については、平成26年4月1日、デザインを一新しました。

### ◆アトリエ

アトリエには、WindowsとMacintoshのパソコンがそれぞれ1台あり、フィルムや紙原稿をスキャンしてデジタル化したり、イラストや印刷用原稿の作成など、様々な目的で活用されています。

パソコンの設置環境については、モニター画面には天井照明からの温白色（色温度3500K）の蛍光灯の暖かみの感じられる光が当たっている状況で、色合い調整がしにくい状態となっていたため、モニターに天井照明からの光を遮る「モニターフード」を取り付けました。

これにより、モニター画面に映り込む光が気にならない落ち着いた環境で色合いの調整をしていただけます。



パソコンのモニターに取り付けた「モニターフード」

### ◆オーサリングルーム

アトリエのパソコン2台と同じように、主に大判プリンターへの印刷で活用されているWindowsパソコンのモニターに外来光を遮る「モニターフード」を取り付けました。

パソコンの設置環境は、アトリエとは違い、天井照明は昼白色の蛍光灯（色温度5500K）ですが、少なからず周りの温白色の蛍光灯からの影響があり大判プリンターで印刷されたプリントの色合わせがうまくできない場合もあったことから、色評価用20W蛍光灯（高演色蛍光管、色温度5000K）の電気スタンドを設置しました。

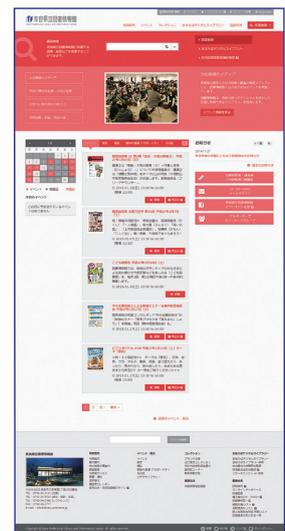
フィルムのスキャンは、16mm、35mm、ブローニ（6×9まで）はNikon SUPER COOLSCAN9000EDで、それよりも大きなサイズのフィルムは、フラットベッドスキャナEPSON ES-10000Gを活用していただくかありませんでしたが、フィルムが持つ、明るいところから暗いところまでの階調をなめらかにデジタル化できる（カタログではOD値最大4.0）フラットベッドスキャナEPSON GT-X970を設置しました。



「蛍光灯電気スタンド、スキャナ、モニターフード」

### ◆ホームページ

以前は、掲載している情報が多岐にわたり、目的のページにたどり着くまでに時間がかかっていました。また、新しいバージョンのブラウザやデバイスで見るとレイアウトが崩れるという問題もありました。より一層ユーザビリティやアクセシビリティを高めるためホームページをリニューアルしました。



↑ 新ホームページ  
（平成26年4月から）

← 旧ホームページ  
（平成22年4月から）

（植村 和彦）

## イベント掲示板

開館以来、「本・読む」と「アート」をクロスさせたイベント・ワークショップを開催してきました。参加アーティストによる展覧会もそれぞれユニークで、既存の美術展とは一味違った実験的な展開を見せてくれました。

◆「読香ワークショップ～本の匂いの記憶をみんなで集めよう～」(4月20日)……参加者が図書館の本をめくる音を聞き、匂い、質を感じて引き出した言葉(写真①、帯部分)から、参加者同士、匂い当てと言葉合わせを楽しみました。



結果は後日、レポートにして展示しました(6月14～29日、写真②)。



◆「服を読む」(ワークショップ5月10日、展覧会5月13日～6月1日)……FORM ON WORDSは「思い出の服を持参した人の言葉から得たアイデアをもとに、古着を新たな服に変換させる」ファッションブランド。展覧会(写真③)ではこれまで集めた古着とエピソードを「洋服図書館」として公開。ワークショップでは奈良の古着が収集されました。



春の恒例「佐保川の春 音楽の日・アートの日」は今年も大盛況でした。

<音楽の日>

◆「大阪フィルハーモニー交響楽団団員によるクラリネット五重奏コンサート」(4月12日、写真④)



◆「伊東裕プレゼンツ『奏春のとき第3章』チェロコンサート」(4月27日)……奈良県出身の若手チェリスト伊東裕氏のコンサートシリーズ第三弾。

◆「フリューリンク・トロンボーン・カルテット」(5月11日)

◆「佐保川ラジオ-未来の図書館のためのメディアプログラム」(5月25日)……“新しい図書館のあり方を探る”をテーマに、1日だけのラジオ局を開設。ネットラジオ(写真⑤)、ライブ会場(写真⑥)とも多数の方にご視聴いただきました。



<アートの日>

◆「世界のブックデザイン 2012 - 13」

(3月11日～4月20日)

◆「読香ワークショップ」(前出)

◆「ブックデザインクロストーク」(4月13日)

◆「my home town わたしのマチオモイ帖」

(4月8日～26日)

秋冬のおもなラインナップを紹介します。

◆トークセッション「本+空間」(10月11日)

……気鋭の書店主3人(写真⑦)～堀部篤史氏(京都・恵文社一乗寺店長、中央)、内沼晋太郎氏(下北沢・B & B、右)、砂川昌広氏(大和郡山・とほん、左)が登壇しました。



◆「大阪フィルハーモニー交響楽団団員木管五重奏コンサート」(11月3日)

◆「ブックデザインクロストーク 書物自身の運命をもつ」(11月30日)

……「『日本とドイツの最も美しい本/世界のブックデザイン』展開催10周年プレイベント(共催:ゲート・インスティトゥート・ヴィラ鴨川)」。世界的タイポグラファーのローランド・シュティーター氏(写真⑧右)と、雑誌『アイデア』のアートディレクターでグラフィックデザイナーの白井敬尚氏(同左)が対談しました。



定期イベントも毎回大勢の方に支えられ、変わらぬ人気ぶりを見せています。

◆「図書館劇場Ⅹ『奈良・大和の群像』」

……千田館長公開講座シーズン9(写真⑨)は、奈良・大和の群像をテーマに6回の講座を開催しています。



図書館劇場Ⅹ第4幕 11月23日

◆「花鹿乃芸亭(はなしかのうんてい)」

……奈良出身の噺家・桂文鹿プロデュースによる図書館寄席(写真⑩)。6年目の今年は毎回古典から新作落語までが演じられ、芸能の無限の可能性を追求する試みが見られています。



図書館寄席 花鹿乃芸亭第27回 8月2日

相談事業も回を重ね、多様なニーズにお応えしています。

◆「医療・健康相談会」(月1回開催)

……回答者は瀬川雅数・済生会奈良病院長

◆「法務無料相談会&知識セミナー」(月1回開催)

……なら法務労務研究会

◆「奈良県司法書士会による『法律講座&無料相談会』」(月1回開催)

◆「中小企業診断士による『体験セミナー&無料相談会』」(年2回開催)

## ■ 企画展示・図書展示

企画展は当館の関係団体や機関、企業等と協同で開催。図書展示では今年話題の出来事などをテーマに、所蔵図書を紹介しています。

なお、各展示とイベントでは、関連図書のブックリストを都度作成し配布しています。

### <主な企画展>

- ・「河瀬ワールドⅣ-最新作『2つ目の窓』の魅力を探る」(7/1～6、7/15～21)
- ・奈良女子大学インターン学生による企画展「くつしたを知ろう」(7/1～6)
- ・「妖怪ワールド～妖怪から見る日本の心～チャッピー岡本のカブリモノ展」(7/15～27)
- ・日本スイス国交樹立150周年記念展「エマー・アンバー ルースイス特派使節の見た幕末日本」(9/2～28)
- ・「古都・奈良今昔寸描写真展～大和郡山市・橿原市今井町～」(10/15～30)

### <主な図書展示>

- ・「シェイクスピアに会う: 祝! 生誕 450 周年」(4/22～6/26)
- ・「追悼ガルシア・マルケス氏～コロンビアのノーベル文学賞作家～逝く」(4/26～5/11)
- ・「宝塚歌劇 100 周年と音楽文化～歌と音楽と物語に親しむ～」(5/31～6/26)
- ・「新幹線開業 50 周年&東京駅完成開業 100 周年 鉄道の歴史を振り返る」(8/30～10/30)
- ・「第一次世界大戦開戦 100 年 史上初の世界大戦」(10/1～30)

## ■ 編集後記

うんてい復刊第7号をお届けします。

当館は開館9年目の今年1月に入館者数が500万人を超えました。また、11月には開館10周年を迎えます。今、図書館を取り巻く厳しい環境の中で、大きな足跡を残せたのも、利用者の方々に支えられ、常に進化をめざしてきた当館の取り組みについて、ご支持いただいた結果であると感じるところです。

本誌掲載の紹介記事につきまして、皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

## ★祝!入館者数500万人達成★

1月14日(水)、入館者数が500万人に達しました。2005年11月3日の開館から2681日目、10周年を前にしての快挙となりました。



500万人目の入館者・三好委久代さん(右)と千田館長

## ★ 近日刊行! ★

「自分の仕事を考える3日間」番外編【ひとの居場所をつくるひとフォーラム】が本になります。

本イベントは、全国から連日数百人が集まる真冬の名物フォーラムです。1回目('09)から3回目('11)は西村佳哲さん(働き方研究家)が企画等を、4回目('12)から6回目('14)は「シゴトヒトフォーラム」として展開。内容は書籍化され全国の書店で扱われています。

今年1月、7回目の「ひとの居場所をつくるひとフォーラム」に西村さんが再び登場しました。

本フォーラムの内容も出版に向け準備中です。



(宮川 ゆきこ)

## 奈良県立図書情報館報 うんてい

(うんてい復刊) 第7号

発行日 平成27年3月1日

発行人 千田 稔

発行所 奈良県立図書情報館

〒630-8135 奈良市大安寺西1丁目1000番地

TEL. 0742-34-2111 FAX. 0742-34-2777